

計するか、という方法論の発達を促すこととなる。この方法論は人口学の大きな柱に発展していく。

第二次世界大戦までの世界は、人口過剰という人口問題があると認識され、そのために国際学会や国際連盟を通じてデータを共有し専門家の交流が進んでいたが、それらは西洋諸国中心であった。何よりも世界は植民地として少数の国により分割されていたのである。宗主国の人口過剰は、植民地へととも簡単に吸収されていった。この時代の人口問題は、人口移動という解決策を見出した、ともいえる。しかしそれで十分であったわけではなく、その証拠に二度の世界大戦が起こった。マルサスがいうところの、積極的抑制である。

III. 「人口問題」から「人口と開発」へ～第二次世界大戦後の地球規模課題

第二次世界大戦後、世界各地でベビーブームが起こった。また1960年前後に相次いだ植民地諸国の独立は、その後高い出生率をもたらした。これらの結果、地球規模の「人口爆発」が懸念されるようになる。またこの時期世界を支配していたのは、アメリカを中心とした自由主義・資本主義とソヴィエトを中心とした社会主義・共産主義との冷戦である。そして「第三世界」という言葉が1952年にフランスの人口学者アルフレッド・ソヴィエにより作られた。アメリカとソヴィエトそれぞれの陣営を第一、第二とし、それ以外の国・地域を第三としたのである。冷戦下の世界の二極化は、結果的には世界各国が、それが富める国であろうが貧しい国であろうが、国際舞台上に登場させたわけである。資本主義と共産主義のどちらにつくか、それは今、中国と台湾と、定期的に国交を変えることによりその都度援助を引き出している国があるように、第三世界の国はうまく利用したところもあるが、援助の成り立ちの要因の一つはこの冷戦での陣取り合戦であるといえる。

このような時代背景の中、世界人口会議が1955年にローマで、その後1965年にベオグラードで行われているが、この二回は学会的色彩が強く、参加者は人口に関する専門家が中心であった。次いで1974年ルーマニアの首都ブカレストで開催された世界人口会議では、各国の政府代表の会議となり、国連人口部はこの会議が最初の国連世界人口会議とみなしている [9]。当会議に参加した山口喜一は「近時における世界人口の激しい増加、とくに開発途上地域におけるそれは（中略）資源についても空間についても有限であるこの地球上で人類だけが無限に増加を続けることは不可能であるという基本的認識を生み、これが人口問題をグローバルな視点から考える契機となった。」と報告している [10]。今で言う「地球規模課題」はすでにこの頃から認識されていた。ローマクラブが成長の限界を訴え [11]、オイルショック（1973年）を経験した世界は、資源の有限性を痛感し、それに対する人口問題に対する危機感が高まったのは想像に難

くない。その頃、石油はあと30—40年で枯渇し、地球の人口許容力もそう多くはないとみなされていた。

10年後の1984年に世界人口会議がメキシコシティで開催された。参加国は149、さらに150以上のNGOが参加し、合計3,000人以上の参加者があったとされている [12]。ローマ世界人口会議（1955年）は62カ国から500人の参加者があり、ベオグラード会議（1965年）は89カ国から850人、ブカレスト会議（1974年）は137カ国から3,500人（他の会議の参加者を含む）、と回を重ねるごとに参加国や参加者が刻々と増えてきており、人口分野に限った話ではないだろうが、20世紀後半の国際社会構築の進展を感じさせるものである。

1955年から1984年までの4回の世界人口会議の論点を比べてみると、一貫して人口増加は中心課題であり、国際・国内人口移動や都市化、農業生産と人口といった論点も大きな位置をもったが、家族計画について取り上げられるのは1965年以降である。『「家族計画」はもとより「人口政策」ということばさえ、国連20年の歴史を通じて禁句であった。』と、第二回に参加した館は報告している [13]。その後、「人口再生産」（第三回）、「女性の地位と役割」（第四回）、と、視点は広がっていく。

また当初は学術的会議であった世界人口会議は、1974年から政府代表が参加する外交、政治的な会議に変わり、その後会を重ねるにつれ非政府組織（NGO）の参加も盛んになり、学術的討議よりは政策指針の策定、実践における意見交換の比重が高まってくる。その一方で、1928年に国際人口学会（IUSSP）が設立され、当初は世界人口会議と緊密に連動して活動していたが、国連と各国政府代表が中心となった1974年以降は、徐々に学術会議として別個に行われるようになっていった。政府機関、NGOといった実際に政策を決め、アクションを起こすグループと、大学や研究所を母体として分析・研究を行うグループは、当初は渾然一体としていたが、だんだん分化していった、ともいえる。

こうした中、1970年以降、サブサハラアフリカを除いた世界各国の出生率は低下をはじめ、1980年代には人口研究は沈滞期となる [14]。フォード財団は人口分野への研究助成を行わなくなり、著名な人口学者であるキーフィッツ（Keyfitz）は、方法論に特化した人口研究はもはや必要とされず、地球規模の問題に対する応用研究を行うべきだと説いた [15]。人口爆発は回避され、次のステップに人類は入ろうとしているところであった。

IV. カイロ国際人口開発会議（ICPD）という転換点

1989年に日本は昭和が終わり、世界は冷戦が終わった。平成になったことによる人口への影響はあまり考えられないが、冷戦が終わったことによる人口問題、とりたてて国際協力、援助体制には、大きな影響を与えたと考えられるのであるが、そのことについて論じられているも

のはあまり見当たらない。

人口に「開発」という言葉が組み合わされたのは、この頃である。1994年カイロ会議は国際人口「開発」会議(ICPD)であり、開発“Development”の単語が挿入された。また翌年の1995年より、国連経済社会理事会(ECOSOC)の専門委員会である人口委員会も、開発の二文字が挿入され、国連人口開発委員会となった。それまでの人口爆発という「人口問題」から、「人口と開発」へ脱皮した、というべきか、変節したというべきか、ともかく新たな潮流が認められるのである。

一つの流れとして、それまでのインフラ投資中心の経済開発から人間開発へ、と開発援助政策そのものがシフトしたことが挙げられよう。国連による人間開発報告が1990年に初めて出版され、保健や教育といった、「人」が向上するための支援が必要だと説かれるようになった。人口研究とは出生、死亡、移動、結婚や家庭など人、人生に関わる事象の追求であるので、本来の人口学は人間開発に資するものであるべきである。こうした流れの中、「人口」と「開発」が一つに結合した、というのは納得がいく。

1990年代は、DAC諸国のODA額は低下している。直接投資額が増大し、すでに世界銀行はその役目を終えたとしたアメリカ政府によるMeltzer報告が出たのは1990年代の終わりであるから、ODA額の低下に寄与したかは定かではないが、この時代に援助疲れ、というものが存在したのではないだろうか。「援助貴族は貧困に巢喰う」といった著作[16]も話題を呼んだ。そうした中で、人間開発レポート(1990年)、リオ地球環境サミット(1992年)、カイロ国際人口開発会議(1994年)、北京女性会議(1995年)と、経済開発とは別の流れが大きく花開くことになる。またエイズという新たな脅威は感染症に対する全世界的な取り組みの必要性を認識させた。経済が発展することにより健康になるのではなく、健康になれば経済が発展するのである、という点が強調され、その流れが2000年のミレニアム開発目標、世界エイズ・マラリア・結核対策基金の設立を促した。

カイロ国際人口開発会議(ICPD)には、参加国180カ国、NGO、報道関係者を含めると総数で約15,000人が参加したといわれ[17]、前回のメキシコ会議と比べ、爆発的な規模となった。またこの会議で、リプロダクティブ・ヘルス/ライツという概念が初登場し、行動計画(Programme of Action)が策定され、会議後20年間に達成されるべき目標が示された。その行動計画は、関係者の中には「バイブル」と呼ぶ人もいるほどである。

行動計画には、人口分野で取り上げるべきテーマがすべて盛り込まれている。すなわち、①持続可能性、②ジェンダー、③家族、④高齢化も含む人口構造、⑤リプロダクティブ・ヘルス/ライツ、⑥疾病・死亡、⑦国内人口移動と都市化、⑧国際人口移動、⑨教育、⑩データ収集と研究、といった項目が挙げられている。しかし議論の焦点は⑤リプロダクティブ・ヘルス/ライツであっ

た。この行動計画の最後には、各国の留保事項が追記されている。留保を示したのは、アフガニスタン、ブルネイ、エルサルバドル、ホンジュラス、ヨルダン、クウェート、リビア、ニカラグア、パラグアイ、フィリピン、シリア、アラブ首長国連邦、イエメン、アルゼンチン、ジブチ、ドミニカ共和国、エクアドル、エジプト、グアテマラ、バチカン、イラン、マルタ、ペルー、と23カ国にのぼり、そのほとんどが中絶の是非と同性結婚に関するものである(ただしリビア、アラブ首長国連邦は相続、イランは婚外性交渉についても留保を示している。フィリピンは移民についてのみの留保)。この中絶、同性愛非容認はイスラム教またはキリスト教の価値観に基づいたものである。

中絶の是非に関して、1994年に留保を示した上記の国々に加えて、国連、UNFPAの主要ドナーであったアメリカ合衆国が共和党政権の際は中絶禁止(Pro-Life)、民主党政権の時は中絶容認(Pro-Choice)と大きく振れることで、ICPD行動計画そのものの存在意義を揺るがした。このことはカイロ会議以降、世界人口会議が開催されなかった経緯とつながっている。カイロ会議10周年の節目にあたる2004年の時のアメリカ大統領は共和党であるジョージ・W・ブッシュであった。その2-3年前からカイロ+10の政府間会議を開催するよう動きがあったものの結局、年次会議である国連人口開発委員会にて10年間のフォローアップを行った。そしてICPDの目標期限である来年2014年にも同様に、個別の会議が開かれるわけではなく、年次会議である国連人口開発委員会にてICPDの総括が、また国連総会にて特別セッションが行われる見込みである。

現時点では、民主党政権下のアメリカは同性結婚を許容する判決が最高裁で下されるなど、中絶や同性婚容認の状態である。ラテンアメリカ地域はカトリック教の影響からこれまで厳しい中絶禁止の態度を取っていたが、地域人口会議にて、中絶解禁へと大きく転向する文書を取りまとめた[18]。一方イラン、アラブ諸国、アフリカ諸国は同性愛者や中絶に対して、刑罰を課すなど激しく反対している国も多く、またプーチン政権下のロシアでは、2013年6月に「同性愛宣伝禁止法案」が圧倒的多数で可決されており、国際会議にも同性愛、同性婚を強く否定する意見を提示している。このようにセクシュアル・リプロダクティブ・ライツについてはまったく議論が収束する気配を見せない。カイロ会議が開催された1994年から20年経ち、国際協力という舞台における「人口問題」の中心の座を奪い取った感のある、この中絶の是非と性的指向に関する議論は、まさにICPDに関する残された課題である。

V. 日本の人口分野国際協力の推移

日本自体の「人口問題」、つまり出生抑制への対応は、戦後の優生保護法の制定による中絶の事実上の自由化、

1974年の日本人口会議を頂点とした一連の施策を挙げることができる。中絶による出生率の低下は、中絶数統計が示すとおり明らかに効果を奏したが、その後の家族計画を通じた出生抑制政策が出生率低下に効果をあげたのかどうかは議論があるところであり、古今東西、人口と政策の関係で常に議論されることではある。とはいえ、女子教育水準の向上といった社会全体の変化が低出生率をもたらしたこともあるが、合計出生率の統計が得られる1925年からの変動を見るからには、そのような政策の効果を無視することは現実的ではないと思われる。いずれにせよ、人口爆発が人口問題であった時代に、日本は出生率抑制という目標を見事に達成したといえる。

この成功経験をアジアに世界に共有しよう、ということで、政府開発援助として、またNGOを通じて人口分野の国際協力が発展していった。メキシコシティー人口会議（1984年）には、日本からの参加者として国際協力事業団（現国際協力機構：JICA）がはじめて参加している。JICAは1974年に設立されているので、この回への参加が始めて、というのは当然であるが、それは日本が援助大国へと進む象徴的な事象でもある。大きく分けて無償資金援助、技術協力、有償資金援助からなる日本のODA（政府開発援助）を担うのは、外務省、国際協力事業団（JICA）、海外経済協力基金（OECF）であったが、そのODA額は、1978年の2,332億円から急速に伸びて1984年には5,281億円と、二倍以上にもなっており、その後1989年にはアメリカを抜いて世界最大の援助国になり、1997年のピーク値1兆1,687億円まで、まさに右肩上がりの援助大放の時代であった。人口分野における

援助も二国間援助としては1969年より家族計画分野を中心にプロジェクト方式技術協力をを行い、1990年代には「人口・エイズに関する地球規模問題イニシアティブ」（GII：Global Issues Initiative for Population and HIV）を打ち立て、世界12カ国の重点国を設け支援を行った。多国間援助では1971年より国連人口基金への拠出を行い、1986年から2000年までトップドナーであった（図1）。

NGOの活動としてはジョイセフの活動を挙げることができる。1968年に家族計画国際協力財団（現ジョイセフ）が設立され、創設者である國井長次郎が提唱する子どもの寄生虫駆除と母の家族計画を統合した「インテグレーション・プロジェクト（IP）」がアジア各国に繰り広げられた[19]。

このような華々しい日本の国際協力の躍進は、しかし20世紀の事象であった。ODA予算額は1997年を頂点としてその後年々減少している。人口分野でもUNFPA拠出金の動向はODA予算額に連動して減少、2013年の拠出金は25百万US\$で、世界第8位となった。バブル時代の大盤振る舞いから、より戦略的な国際戦略としての手段の一つにODAが変容してきた、ということでもある。

VI. 人口問題の今後と開発目標

ミレニアム開発目標（MDGs）の次の開発目標がどのようなになるかは、現時点（2013年9月）では全貌は見えない。MDGsについては目標策定過程が「密室で行われ不明瞭である」という批判があり、それに答えて、インターネット上でのオープンな協議も行われているが[20]、

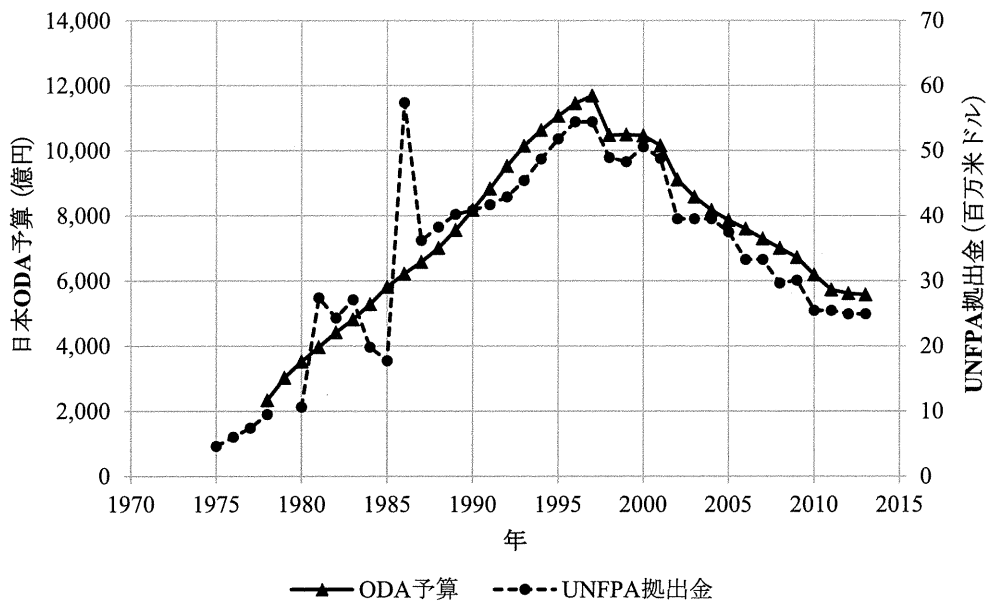


図1 日本の一般会計ODA当初予算およびUNFPA拠出金の推移

出典：ODA予算は外務省HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryoyosan.html> (accessed 2013-09-13), UNFPA拠出金は2010年までKlaus Hufner, Global Policy Forum, http://www.globalpolicy.org/images/pdfs/Top_10_Donors_UNFPA_1974-2010.pdf (accessed 2013-09-16), 2011年以降はUnited Nations DP/FPA/2013/4

そこで挙げられた人口高齢化、人口移動を含む「人口変動Population Dynamics」は、5月に公表されたハイレベルパネル報告書 [21] にはその重要性が論述されているものの、目標項目 (Goals and Targets) には含まれていない。人口高齢化は裏返せば出生率抑制の成功の結果であり、国際開発の枠組みからは問題とみなす人がまだ少ないこと、人口移動については移民流入を制限する国が多いこともあるが、何よりも明確な数値目標がないこと、といった理由がある。家族計画についてはすでにMDGsにも数値目標としてあがらなかったが、MDGsは保健に偏りすぎである、という批判もあり、ポスト2015年開発目標では、保健、教育以外に、資源、雇用や平和構築といった新たな項目が多く追加されそうである。

これまで見てきたように、人口爆発という地球規模の脅威に向かって地道な対策を行ってきた努力は結果を出した。その時に作られた組織・体制を維持するためだけに新たな「人口」と名のついた目標設定を押し込むのは本末転倒である。国際協力分野であれ、国内政治問題であれ、対策をして解決されたら、新たな課題に取り組みねばならない。それではそのような新たな課題というのは何だろうか。

「人口変動」は現在ゴールやターゲットとして取り上げられていないが、中期・長期的課題として地球規模問題として取り上げるべき事項であろう。まず高齢化についてであるが、図2に世界の地域別従属人口指数 (15歳未満・65歳以上の従属人口の、15~64歳生産年齢人口に対する割合) を示す。アフリカを除いて、2010年から相次いでこの指数が底をつき、その後急速に上昇していくのを見て取れる。この上昇は、従属人口のうち、高齢人口の増加によるものであり、グローバルな高齢化が着実

に進行しているということである。この算出に用いた国連の人口推計は出生率低下を過小評価する傾向があるが、出生率を低位に設定したデータでみても、同様に従属人口指数の谷間は、今まさに訪れているのである。まずは欧米、東アジアで2010年に、次はラテンアメリカ、東南アジアで2020年台に、中近東南アジアでは2040年に底がつく。この従属人口指数が下がる、ということは、1人当たりの労働者、つまり稼ぎ手が養わなければならない子供や高齢者が少なくなることであり、高生産・低負担の社会全体の生産性は高く、この状態は「人口ボーナス」と呼ばれる。つまりこれから20~30年は人口ボーナスを享受出来る最高の時代であるともいえるが、その後は世界全体で高齢化が進み、再び低生産・高負担の社会になっていく。今の間に中長期的に見た、人類規模の高齢化対策を模索する必要がある。

また人口変動として、都市化と連動した国内人口移動、移民、難民政策にもつながる国際人口移動は、重要な論点である。国内人口移動に関しては、すでに2010年で都市人口は世界人口の半分を超えたとされており [22]、都市部の貧困対策はもとより、今後人口増加がしばらくは続く東南アジアや南アジアにおけるメガシティの持続可能な都市計画のためには、どのように人口の都市集中が進むか、という基本的な分析が必要である。こと国内人口移動については、各国で統計の取り方が異なっており、国際比較が難しい状況があった。しかし近年では国連統計部の勧告 [23] に基づき、各国の人口センサスで、1年移動率や5年移動率といった国内移動に関する均質な指標が得られるようになってきており、さらにそれらを使った国際比較分析が国連人口部を中心に行われている [24]。国際人口移動については、やはり同様に送出側

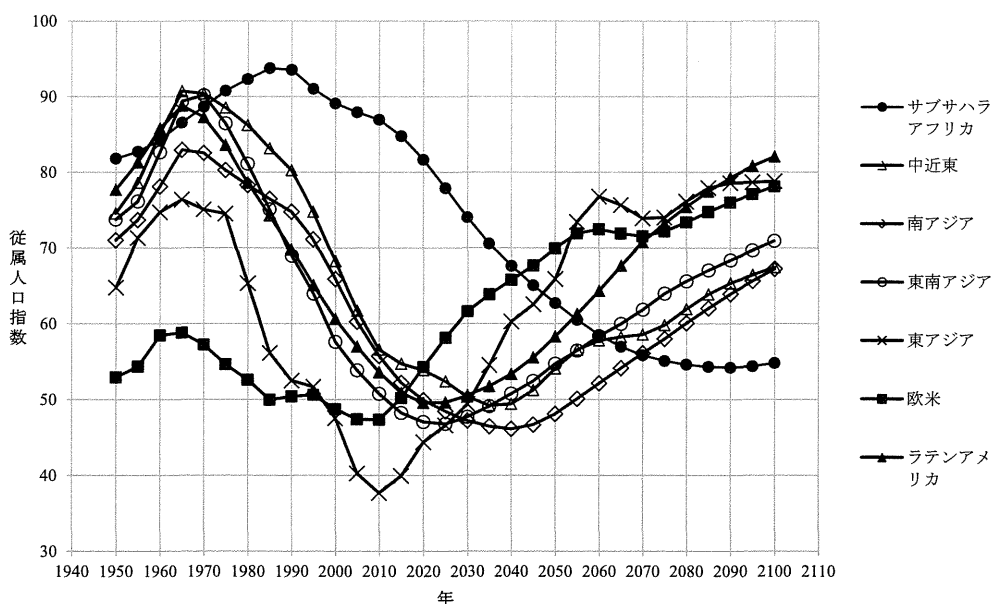


図2 世界各地域の従属人口指数
出典：United Nations, World Population Prospects: The 2012 Revisionより筆者算出。

と受入側についてすべての国を網羅したデータが2012年に国連人口部により集計・公表された [25]。これを元にすべての国についてのデータに基づいたグローバル・レベルの研究が、今まさに進捗中、といったところである。出稼ぎによる仕送りが援助額を越えた、とされたのは2000年であるが、近年の欧州各国の右翼化と外国人排斥運動、また送り出し国自体の人口増加が収まってきていることもあり、国際人口移動を一方向的に良し、とする論調は弱くなってきているようであるし、また頭脳流出、という古典的な議論や、外国に行かざるを得ない、自国での雇用がないという元凶を解決する方が重要である、といった意見も、アフリカなどの送り出し国から聞かれるようになってきている。移民の登録や基本的な権利を確保するための諸施策はすでに国際的コンセンサスができてきているが、国内人口移動、国際人口移動双方で、移動したほうがよいのか、とどまったほうがよいのか、という点についてはまだ明瞭な方向は見えていない。人口移動が現状でポスト2015開発目標に入らないのも、何を目標とし、指標を設定したらよいのか、まだ十分な研究と議論がなされていないことによるものであり、この点をじっくりと煮詰めていく必要がある。

今回新たにハイレベルパネル報告書における目標に取り入れられた人口関係の項目がある。それは人口登録 (Civil Registration) に関するもので、ガバナンスに関わるターゲット [26] として「出生登録などの法的な身分証明方法を無料で普及させる」と挙げられている。わが国は中国・韓国とならび古くから戸籍制度があり、さらに並列して住民登録もあり、国勢調査とどうつなぐか、高齢者の除籍がなされないことなどの検討事項もあるが、基本的に人口登録、出生・死亡届はほぼ全数カバーされているとみなしてもよい。しかしアフリカはもとより、アジアにおいても、出生が登録されている割合はインドで41%、インドネシアで55%、ネパールに至っては35%と依然低く、死亡届はさらに低いカバー率となっている [26]。出生が登録されれば、予防接種、初等教育など基本的なサービスを受けることにつながり、妊産婦死亡率といった標本調査では詳細なデータを取ることが難しい指標も、女性の死亡届が死因と共に登録されることで、状況をきちんと把握することができ、効果的な対策につながる。また近年、安価な指紋認証技術などの発達、選挙制度を公正に行うことの重要性が認識され、これまで登録制度が不備であった国々で急速に新技術を利用した住民登録が行われるようになってきている。

そもそも人口登録制度が不完全である状況から、国勢調査や標本調査が推進されてきた経緯がある。センサスについては現在、世界ほぼすべての国で少なくとも一回は行われ、国連が推進した2010年ラウンド世界人口住宅センサスプログラムでは、史上最多の202カ国がすでに実施し、合計228カ国・地域のうち、このラウンドで実施が予定されていないのはエリトリア、イラク、レバノン、パキスタン、ソマリア、ウズベキスタン、西サハラ

の7カ国・地域のみ、という状況になっている [27]。出生率や死亡率といった人口関係指標を得るために、人口登録がない国では標本調査が行われているが、1970年代に始まった世界出生力調査 (World Fertility Survey) は1980年代からUSAIDやUNICEFの支援を受けたDHSやMICSといった調査として広く行われるようになり、現在サブサハラアフリカに至るまでデータがかなり蓄積されてきている。この人口データの世界レベルでの充実、出生届や死亡届がユニバーサルに行われることによりさらに進むわけであるが、20世紀、先人達の努力により成し遂げられた進歩が、人間開発という理論的枠組を支えるインフラとなっていた事実を忘れてはならない。データに基づいて分析し、適切な目標・政策を立て実施し、データに基づいて評価する、というサイクルは、国際開発協力のみならず、政策科学の基本である。「人口学」の変わらぬ意味づけはここにあるといっても過言ではない。

このような人口に関する新たな課題について、さらに取り組むべき制度的な問題がある。第一に、「援助」というものの構造的改革である。現在BRICSと呼び習わされるブラジル、ロシア、インド、中国といった中進国は、G7からG20への国際政治については勢いを増しているものの、開発援助についてはどうだろうか。依然「発展途上国」の心地よい地位に甘んじていると見られなくもない。そもそも冷戦時代に西側であった欧米日本は、現在の経済成長率は低く、特に日本などはその世界一の高齢化と政府財政赤字、さらに東日本大震災で受けた被害を考えれば、援助をするどころか受けたい位のレベルである。真の意味で対等な国際社会の再編成が求められているのではないか。また中進国にとってみても、「中進国の罫」、つまり低所得からある程度発展したものの、中所得から高所得には登りきらない状況に陥らないための、新たなチャレンジが求められていると思われる。同時にOECDのDAC (開発援助委員会) は冷戦も終結し、中進国が重要なドナーとなってきている現代にどのように存在意義を見出すのか、検討が必要な時期に入っているであろう。

ハイレベルパネル報告書におけるターゲット12dは「先進国はGNPの0.7%をODAに割くべきである」としているが、持続可能性がキーワードとなっているポスト2015年開発目標としては首を傾げざるを得ない。アフリカを含めた後発開発途上国も、援助プロジェクトにおける受入国負担金として多額の国家財政を投じているなか、真の国際社会の協力体制を築くのであれば、すべての国についてGNPの一定額負担を設定すべきではないか。それは長期的には「世界政府」へとつながることになるかもしれない。

現在の国際社会で重要な役割を果たすべき国連とその諸機関も、例えば高齢化といったマルチセクターな事象については諸機関の間での縦割り意識もあるのか、まだ本格的な取り組みに至っていない。UN AIDSやUN WOMENのような、国連諸機関横断型の組織を、例え

ば「UN AGE」という組織を新たに設置し、地球規模課題としての人口高齢化について取り組んだらどうかという案もある。

人口高齢化という事自体は祝福されるべき事象であり、既存の政府開発援助のスキームで対応するのは難しい、という意見もある。死亡率を下げ人口高齢化を成し遂げた国はすでにある程度の政策の蓄積があり、課題に対応するための基本的なデータや分析を行う人材も整っているところである。このような分野では、「富む国が貧しい国に援助する」という形ではなく、国際協力や国内政策担当者が、大学や研究所、さらにNGOなどの専門家らと連携しながら制度構築と改善を行っていく、という形が有効となる。これは、人口高齢化のみについてではなく、中進国が躍進する現在における、国際協力の方向ではないだろうか。

最後にICPDの議論で見てきたように、中絶や同性愛といった、価値観に左右される懸案に対して国際社会は果たして公正な態度をとれているといえるだろうか。文化的、価値観に関わる、ことに宗教に関する議論は開発協力では避けて通られることがこれまでは多かった。しかし現在、この点を考えないと何のために何をしているのか、何も見えない状況に人類は至っているようにも見える。

引用文献

- [1] United Nations. The Millennium Development Goals Report 2013. Available from <http://www.undp.org/content/dam/undp/library/MDG/english/mdg-report-2013-english.pdf> (accessed 2013-09-14)
- [2] 葛剣雄, 編. 中国人口史. 上海: 復旦大学出版社; 2002.
- [3] 兼清弘之. 日本における人口研究の歴史. 日本人口学会, 編. 人口大事典. 東京: 培風館; 2002. p.272-7.
- [4] Jacques Vallin. Démographie. In : France Meslé, Laurent Toulemon, Jacques Véron editors. Dictionnaire de démographie et des sciences de la population, Paris : Armand Colin; 2011. p.83-5.
- [5] Herve Le Bras. L'Invention des populations - Biologie, ideologie et politique. Paris : Editions Odile Jacob, 2000.
- [6] 吉田忠雄. マルクス主義と新マルサス主義. 日本人口学会, 編. 人口大事典. 東京: 培風館; 2002. p.254-8.
- [7] Aine Collier. The humble little condom : A history. New York: Prometheus Books; 2007.
- [8] 館稔. 国連世界人口会議の概要. 人口問題研究第61号; 1955.
- [9] 国連人口部. United Nations Conferences on Population. <http://www.un.org/en/development/desa/population/events/conference/index.shtml> (accessed 2013-09-14)
- [10] 山口喜一. 国際連合世界人口会議. 人口問題研究第132号; 1974.
- [11] Meadows DH. Meadows DL, Randers L. Behrens WW. The limits to growth - A report for the Club of Rome's project on the Predicament of Mankind. New York: Universe Books; 1972
- [12] 岡崎陽一, 河野稠果. 国連国際人口会議の概況. 人口問題研究第172号; 1984.
- [13] 館稔. 第二回国連世界人口会議の概要. 人口問題研究第97号; 1965.
- [14] 河野稠果. 国際人口学会IUSSPニューデリー大会. 人口問題研究. 1989; 45-3.
- [15] John C.Caldwell. History of Demography. In: Demeny P, McNicoll G, editors. Encyclopedia of population. New York: Macmillan Reference ; 2002. pp.216-21.
- [16] Graham Hancock. Lords of Poverty: The Power, Prestige, and Corruption of the International Aid Business. New York : Atlantic Monthly Press ; 1989.
- [17] 阿藤誠. 国際人口開発会議 (カイロ会議) の意義—新行動計画とその有効性. 人口問題研究. 1994;50 (3) :1-17.
- [18] United Nations Economic Commission for Latin America. Montevideo consensus on population and development ; 2013. Available from <http://www.unfpa.org/webdav/site/global/shared/documents/news/2013/Montevideo%20Consensus-15Aug2013.pdf> (accessed 2013-09-21)
- [19] ジョイセフ. ジョイセフのあゆみ. <http://www.joicfp.or.jp/jp/profile/history> (accessed 2013-09-17)
- [20] United Nations. The World We Want. <http://www.worldwewant2015.org> (accessed 2013-09-18)
- [21] United Nations. The Report of the High-Level Panel of Eminent Persons on the Post-2015 Development Agenda ; 2013. Available from http://www.un.org/sg/management/pdf/HLP_P2015_Report.pdf (accessed 2013-09-18)
- [22] United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division. World Urbanization Prospects: The 2011 Revision, CD-ROM Edition. ; 2012. Available from http://esa.un.org/unup/Maps/maps_overview.htm (accessed 2013-09-21)
- [23] United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Statistics Division. 2010 World Population and Housing Census Programme, Standards and methods. Available from <http://unstats.un.org/unsd/demographic/sources/census/census3.htm> (accessed 2013-09-21)
- [24] United Nations, Department of Economic and Social

- Affairs, Population Division. Cross-national comparisons of internal migration: An update on global patterns and trends. Technical Paper No. 2013/1 ; 2013. Available from <http://www.un.org/en/development/desa/population/publications/pdf/technical/TP2013-1.pdf> (accessed 2013-09-21)
- [25] United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division. Cross-national comparisons of internal migration: An update on global patterns and trends. Technical Paper No. 2013/1 ; 2013. Available from <http://www.un.org/en/development/desa/population/publications/pdf/technical/TP2013-1.pdf> (accessed 2013-09-21)
- [26] United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Statistics Division. Coverage of Birth and Death Registration. http://unstats.un.org/unsd/demographic/CRVS/CR_coverage.htm (accessed 2013-09-20)
- [27] United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Statistics Division. Progression of the 2010 Census Round. http://unstats.un.org/unsd/demographic/sources/census/2010_PHC/censusclockmore.htm (accessed 2013-09-23)

